

「エサウとの再会」

2021年04月30日

すなわち、召し使いとその子らを先頭に、レアとその子らはその後に、そしてラケルとヨセフを最後に配置した。ヤコブは先頭に進み出て、兄に近づくまで、七度地にひれ伏した。するとエサウは走り寄ってヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた。(創世記 33 章 2 節～4 節)

ヤコブは兄エサウと再会する時を迎えた。目を上げて見ると、エサウが 400 人の供の者を連れてやって来た。ヤコブは、エサウが穏やかな態度であるか、殺害の息を弾ませているか、どのような態度に出るか、不安と恐怖で身構えた。召し使いとその子らを先頭に、レアとその子らをその次に、ラケルとヨセフを最後に配置した。これは、殺害に備えて、愛する者を守ろうとする序列である。ヤコブは先頭に進み出て、エサウに近づくまで、七度地にひれ伏した。するとエサウは走り寄って、ヤコブを抱き締め、首を抱えて口づけし、二人は共に泣いた。20 年ぶりの兄弟の再会である。

エサウが、先に出会った家畜の群れは何なのかと尋ねると、ヤコブは、ご好意をいただく贈り物であると答えた。エサウは、自分は多くのもを持っているから、あなたが持っていないと断ったが、ヤコブは、神が恵んでくださり、私には既に何でもあるから、ご好意をいただけますならば、受け取ってくださいと、しきりに勧めたので、贈り物を受け取った。またヤコブは、「神の御顔をみるようにあなたの顔を見ております」とさえ言って、再会の喜びを述べている。20 年ぶりの再会は、主人に対し平身低頭する僕の態度であって、懐かしい兄弟の再会とは思えない。しかし、ヤコブはエサウに受け入れてもらいたと必死で身を低くした。贈り物も受け取ってもらえ、エサウとの再会を平和裏に果たした。エサウはヤコブの策略にかかり、長子の権利を売り渡したこと、兄と偽って、父イサクの祝福を騙し取られたことを意に介していない。赦したのではなく、忘れていようである。ヤコブは、このことで頭一杯で、赦されるために可能な思いと手段を尽くしてきた。二人の兄弟の違いが表れている。エサウは、ヤコブに二度も騙され、殺そうと激怒した。しかし、ヤコブが家を出た後、父イサクの財産を継承し、今は、資産家になった。もう、長子の権利とか父からの祝福など、どうでもよいことであった。一方のヤコブは、父イサクから財産の譲渡は一切ない。しかし彼は、長子の権利、父からの祝福に徹底的に拘った。財産ではなく、目に見えない神との関わりを求め続けた。自分の罪深さを知るヤコブは、祝福なしでは生きられないと神を渴望したのである。

エサウは自分が先導して、故郷に帰ろうと促すと、ヤコブは丁重に断っている。子どもたちはか弱い。乳を飲ませている家畜を無理に追い立てると死んでしまう。彼らの歩調に合わせ、あなたの元にゆっくり行きたいので、先にお進みください、と。エサウは、では、連れている者の何人かをあなたの所に残しておこうと提案すると、ヤコブは、「いえ、それには及びません。ご主人様のご好意だけで十分です」と、これも断っている。ヤコブはエサウの赦しをまだ信頼していない、いつ襲われるかも知れないという恐怖があったからである。彼は自分の邪悪さが他人にも同じようにあると思い、怒りを忘れたエサウを理解できない。エサウはセイルに帰り、ヤコブはスコトに移り、家を立て、家畜の小屋(スコト)を作った。ヤコブは、パダン・アラムからカナンに戻り、シェケムの町に宿営し、天幕を張った。その土地の一部をシェケムの父、ハモルの息子たちから買い取り、祭壇を築き、主の名を呼んだ。それをエル・エロヘ・イスラエル(イスラエルの主なる神)と呼んだ。